

インディラ・ガンディー国立芸術センター

～センターにおける文化芸術施策について～

報告者:大澤 彰久

1 概要

- ・インディラ・ガンディー国立芸術センター（以下、IGNCA）は、1985年に設立され、1987年に文化省傘下の国立機関として発足した。
- ・文学（口承・文書）、視覚芸術（建築、彫刻、絵画、写真、映画など）、舞台芸術（音楽、舞踊、演劇）など、幅広い分野を対象とした研究を行っており、インド芸術の総合的な研究拠点の役割を担っている。また、芸術を自然、社会構造、宇宙観と相互に関連するものとして捉え、インドの伝統的な世界観に基づいた学際的・多分野的なアプローチを採用している。

2 主な出席者

Professor/Head of Division

Member Secretary

3 主な説明内容

今回の視察先であるIGNCAは、2025大阪・関西万博におけるインドパビリオンにおいて、「古の伝統と現代技術の融合」「文化遺産と科学／イノベーションの共生」「多様性と包容力を体現するインドの精神の表現」をコンセプトに、文化省の下、パビリオン全体の演出を企画・担当された。

御説明いただいた教授は、頻繁に日本を訪れておられ、大阪に滞在したほか、神戸、姫路、京都を訪れ、京都訪問の際には大谷大学の副学長と面会し、その結果、研究交流を促進するための協定書（MoU）が締結された。神戸では在日インド人コミュニティーとの集まりに参加し、インドア・ウィークにも参加された。

IGNCAは、国内最大のインド美術・文化の保存庫であり、世界中の研究者のために様々な資源の整備に取り組んでいる。40万冊を超える書籍を所蔵する大型の図書館があり、その中にはインドの美術と文化に関する著名な著者による稀少な書物も含まれている。図書館には膨大な写本コレクションも所蔵されており、所蔵する写本から重要な書籍を解読し出版する責務を負っている。

また、若い研究者のために、稀少な記録や聖典を現代的な文献形式へと移し替える取組も行っている。

センターには、仮面、絵画、織物等の保存修復スタジオ、文化アーカイブ（ミュージア

ム収蔵庫)におけるコレクション展示、そして文化と情報科学をつなぐ文化研究室もあり、スキャナーやサーバーを含むインフラは、インドの文化機関の中でも最高水準のものと評価されている。

書籍や写本の保存修復の過程では、まず状態報告書を作成する。これは医師が患者を診断するようなもので、対象物の現状や確認された問題点を詳細に記録する。現在ではこの記録はデジタル化され、保存されることが多くなっている。

状態報告書では、虫害などさまざまな損傷が特定される。今回視察した際に作業されていた写本は、調査の結果、虫害の原因は写本の中にあった竹の棒に関連していることがわかった。こうして保存修復の提案書が作成される。修復作業には多大な労力が必要であり、基本的には修復が最小限に収まるように行われる。写本は、基本的にはあまり手を加えずに保存されるが、ある程度読めるように、取扱いをしやすくするために必要な変更が加えられることもある。修復には、ポリエステルシートのような素材が使用され、元の紙に接着しない形で写本を保護する。元の綴じ糸や、外れた小さな紙片までもが丁寧に記録され保存される。元の装丁に使われていた布さえも保存され、対象物の歴史の一部が失われないようにしている。この緻密な手法により、写本の歴史が保持され、全体を通して可能な限り最小限の介入で修復が行われる。

4 主な質疑

- 大阪・関西万博でインドパビリオンを訪問し、伝統を感じる素晴らしいパビリオンで、予約をしてヨガ体験をさせていただいた。例えばヨガであったり、踊りであったり、そういった無形文化に対する維持についての考えはあるか。
- インドという国はすごく多様性のある国で、多様性があるから我々が多様性に慣れ、我々の生活の一部になっている。多様性がなければ我々は生活できないし、常に学んでいる。同じものがいつも残るわけではないけれども、残ったものの中で色々な変化などにも十分に対応していく。
- まさに多様性というものが、このインドの中においては大事であり、有名なラーマヤナとかマハーバーラタ等、様々な宗教と結びついたものがある。日本においても神話があるが、そういったものをどのように伝えていくのか、またこちらでもそういったものに関わっておられるのか。
- ここでは、それらは事実であり、実際に起きた物語なので、我々は今でも信じている。広い国なので、州によって話が多少違うこともあり、それらの話を修正して学者等に對して説明してあげることが我々の仕事である。

○ インドは日本よりすごく長い歴史があり、その長い歴史の中で残してきた様々な文化や芸術をこれからさらに残していくには、先ほど言われた人材を育成するということが非常に重要だと思うが、その人材を育成していく上で一番大切に思っていることは何か。

→ 確かに古いものもあるが、今あるアートとか技術とかそういったものは、生活の中に流れていったものなので、今まで維持する必要性がなかった。しかし、今は生活水準とか生活形態が変わってきているので、今こそそういうものを維持する必要性が出てきている。そのために、祖先が使っていた技術や方法を教えているほか、伝統的な方法を維持するため、化学性のもとか害のあるものではなく、なるべく自然なやり方でやっている。

○ 人材の育成や確保ももちろん非常に大事だと思うが、インドは歴史も非常にあるので、過去の歴史の研究とか文化研究をしていく上での努力や大学との連携等はあるか。また、インドでは、日本で言う考古学のような分野はあるのか。

→ 我々の課題として、昔使用されていた文字がもう使われていない点が挙げられるため、様々な学者によって定義づけを行っている。

今の若者たちは、技術や見栄えの良いものに憧れがあり、昔の文化や芸術に興味がない。例えば遺跡発掘調査等は、現時点では目立たないし、また数年間の努力で建物が見えるようになっても、まだまだその過程で仕事している人々の努力があまり見えないので、若者には憧れる仕事とは思えないと思われるが、きっと 100 年後には認められる仕事になると励ましている。

5 所感

今回のIGNCAの視察は、インドという多層的な歴史と文化を持つ国の奥行きを体感するとともに、日本の伝統文化の歩みやその継承の在り方について改めて考える大変貴重な機会となりました。インドは、日本よりもはるかに長い歴史を有する国ですが、日本もまた文学、絵画、音楽、舞踊、更には歴史的建造物など、多彩な文化遺産を受け継ぎ今日まで発展させてきた国です。両国は異なる環境にありながらも、長い年月の中で人々が築いてきた文化を後世へ伝えるという責任を現代に生きる私たちが担っているという点で共通しており、本視察はその使命を改めて胸に刻む機会となりました。

特に印象的であったのは、インドが多様性を内包しつつ、統一性を保ってきた文化的な在り方です。長い歴史の中で、複数の民族による政治的統治が繰り返され、宗教においても多種多様な信仰が共存しています。また、公用語が 22 に及ぶという言語的多様性も特徴であります。しかし、その大きな多様性を束ねるように、目には見えない無数の糸が文化の基盤として機能しており、それこそがインド社会が持つ精神性の支柱になっていると強く感じました。多様性の中に文化的な統一を見い出す姿勢は、島国で比較的均質な

文化を持つ日本とはまた異なる文化形成の在り方を示しており、大変示唆に富んでいました。

今回訪れたIGNCAは、インド政府文化省の行政管理下に置かれながらも、自立した理念と体系を持ち、自然や社会構造、宇宙論といった広い視座から芸術を捉えている点に特徴があります。芸術を単なる作品や表現として扱うのではなく、人間の生き方や環境との相互依存の中で理解しようとする姿勢は、日本における伝統芸能や文化遺産の捉え方にも通じるものがあり、非常に興味深いものがありました。また、IGNCAで扱われる芸術領域は、文学（書面・口述）、建築、彫刻、絵画、写真、映画といった視覚芸術、さらに音楽、舞踊、演劇などの舞台芸術、さらにはフェアやフェスティバルといった生活文化に至るまで、実に幅広いものです。芸術そのものを社会の営みや生活文化として包括的に捉えるアプローチは、文化を「守る」だけでなく「生かす」視点の重要性を示しています。多様な研究、出版、研修、創造活動、そしてパフォーマンスプログラムが連動し、芸術を日常の人間環境の中へ位置づけようとする取組は、文化の持続性に対するひとつの理想的な形だと感じました。特に人材育成への積極的な取組は、長い歴史を尊重しながらも、未来を担う若者が文化を学び、体験し、発展させていくためのプログラムもあり、文化の保存と継承には教育が不可欠であり、その点でIGNCAの姿勢は日本の文化行政にも参考となるべきところがあると感じました。

今回の視察は、インドの多様性を包摂する文化観、日本の伝統文化の強みと課題、そして両国の文化継承の在り方を重ねて考える機会となりました。京都や日本がこれからも豊かな文化を守り育てていくために、本視察で得た知見は大いに役立つものであったと強く感じています。



調査事項を聴取